

ハイスクールD×D～切札の赤龍帝～

bear glasses

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、ハイスクールD×Dの世界にT2ガイアメモリが流出したら？

もしも、一誠に転生者の友達が居たら？

これは、色々なifを詰め込んだ話。

※この話では、大罪の少女もまとめて話に突っ込んで、色々まとめます。単純に、リメイクも兼ねたCHAOS作です

目次

Side Extra	オルタナティブ・スタート	1
Side Red	切札の赤龍帝	1
切札の覚醒		6
転生者・竜胆琥太		10
Iの覚悟／赤龍修行		14
Side Red First	Trial	■
■の使者		■
新たなる事件の始まり		19
崩壊のP／世界は悪意に満ちている		28
Side White	永遠の白龍皇	1
少年少女、邂逅す。		35
龍皇少年、永遠を掴む／人造少女は幻想を得る		40
人造少女とラーメント		44
Side Black	幼き魔法使いと牙持つ墮天の狗神	1
琥太、狗神と出会う		48
外法の魔術と四凶の禱杓	前編	52
外法の魔術と四凶の禱杓	中編	58
外法の魔術と四凶の禱杓	後編	63

Side Extrairオルタナティブ・スタート
極限の邪龍少年

俺、匙元士郎がまだ小学生だった時の事。

ヒュウウウウウウウン?!

遠くから風切り音が聞こえてきたかと思うと

ガアアン!

と、爆音を立てて目の前に黒い何か落ちてきた

「うわあ!？」

いきなりすることに驚きつつも、黒い物体の落ちてきたところを見ると

「ゆーえすびーめもり?」

そこには黒く、クリアで「青銀色の端子」のゴテゴテしたUSBメモリがあった。小さかった俺は好奇心でそれを拾い上げ、

「うわあー? かつけー! お、スイッチがついてる。押してみるか」

スイッチを押した。すると

『X t r e m e!!』

「エクストリーム?」

その瞬間、意識が暗転した。

—————

目が覚めると、目の前に蛇のような化け物がいた。

「うっ、うわあ!?! ば、化物!?!」

『誰が化け物か。我が名は黒邪の龍王ヴリトラ、ブリズン・ドラゴン五大龍王が一体である。』

「五大龍王!?! つてなにさ」

『お前は? まあいい。』

ヴリトラは嘆息しつつも話を続ける。

『まあ知識をくれてやる』

瞬間、匙の脳内に様々な情報が広がる。

ヴリトラのこと、三大勢力の事、裏社会の常識 e t c. e t c. を得られた。

「?え?お前クソ疫病神じゃん」

『語彙力どうしたバラガキ』

思わず、辟易とした顔になる。なんだお前。『力』と『女』を引き寄せる?それ俺が雑魚の場合秒殺やんけ。と。

「ええー?お前渡したら俺死ぬだろ?」

『勿論』

「普通に巻き込まれても死ぬだろ?」

『今のままならな』

「死ぬクソ蛇モドキ」

『殺すぞサルガキ』

ああ、くそ。

「強くなるしかないのかあ?」

『その通りだ。諦めるんだな』

ケタケタと笑う蛇野郎を見て匙は決意した。

「――『この駄蛇は殴り飛ばす』

と。

しかし、この駄蛇はこの後の人生――、否、悪魔生で自身を助け、自身の力になる相棒となるのだが?匙にとっては今はただの疫病神である。

――

数日後、裏山にて。

『さて、では俺の力を顕現してみるところ。本来であれば我が分身に宿っていたのは黒い龍脈アプソフション・ラインであるが、その『エクストリームメモリ』とやらの影響により、邪龍ブレイズ・ブラック・フレアの黒炎や、漆黒デリート・フィールドの領域、龍シャドウ・プリズンの牢獄の能力も獲得している。』

「つまり?」

『我が分身は神器を4つ持っているも同じ。という事だ』

「なるほど。んで、どんなことができるんだよ?」

『ではまず我が分身の本来の力、黒い龍脈アフソープシヨン・ラインから始めよう。右手に意識を集中してみろ』

「わかった」

そう言われ、意識を右手に集める。すると

「うおっ!?なんだこの触手」

『これが黒い龍脈アフソープシヨン・ラインだ。能力はシンプル。なんでも接着し、そこからなにかしらを吸収する』

「なにかしら?」

『力であったり、体力であったりだ』

「なるほどな」

なんか、陰湿だなこれ。

『では次だ。?そうだな、炎が灯るイメージをしつつ、左手に意識を集めてみる』

「了解」

続いて、左手に意識を集めつつ、炎が灯るイメージを行う。

「?おお」

すると、左手になにか澱んだような黒い炎が灯る。

『これこそ我が呪いの黒炎。?そうだな、大抵の敵なら炎と共に呪い殺せるぞ。ちなみにこれが邪龍ブレイズ・ブラック・フレアの黒炎の能力だ』

いやだから陰湿すぎねえ?

『さて、その炎を維持しつつ、その石に狙いを定めてみる』

そう言われ、俺は目の前の小石に標準を合わせる。

すると、その周囲を黒炎が覆って、炎の壁を成した。

『これが龍シヤドウ・プリズンの牢獄の能力だ』

ええ?なんかもう、すげえな。

『さて、最後だが?こう、体の奥底に力を貯めて、解放してみろ』

あー、きあいだめみたいなものか。言われた通りに力を込めると、周囲が黒い領域に支配される。

『これが漆黒デリート・ファイールドの領域の効果。相手の魔法力を削る空間を作り出す』

「いやお前本当に能力陰湿すぎだろ!」

『なにを言っている。我が分身。私は『邪龍』、ダークネスでドラゴン

なのだ。そんなかつこよくて主人公然とした能力な訳あるまいよ。』
「ふぎけてやがる?」

と、そこに、突然声が聞こえた

「あ、匙!」

「!?」

少し向こうに、同じクラスの兵藤一誠が居た

まてまて!これバレたらやばくないか!?

『これは?ドライブ!?!』

「ドライブ?!」

わからん単語だ。兵藤がドライブ?とやらなのか?

と、何処からか来た一誠が俺にこう続けた。

「お前も『セイクリッド・ギア神器』持ってたんだな!」

「お前も!?!じゃあ兵藤も持ってるのか!?!」

「うん。俺が持ってるのは『ロンギヌス神滅具』、『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』」

「ろんぎぬす?ぶーすてつどぎあ?」

『セイクリッド・ギアロンギヌス—神滅具というのは、セイクリッド・ギア神器の中でも特に強力

な、『ブーステッド・ギア神をも滅する具現』と言われている13のセイクリッド・ギア神器だ。その中で

も『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』というのは、二天龍と呼ばれた、最強クラスのド

ラゴンの一体、ウエルズウエルシュ・ドラゴンの赤い竜、『ウエルシュ・ドラゴン赤い竜』の力が封じられた

セイクリッド・ギア『セイクリッド・ギア神器』というわけだ。』

「なにそれすげえ」

主人公かよ。すると、一誠は俺の右手?その中の黒いUSBメモリ

を見て、

「あ!しかもガイアメモリも持ってるのか!」

と言う。おいまて

「このこと知ってるのか?」

「うん。俺も持ってるからな!」

『Joker!!』

「まじか?教えてくれないか?このこと」

「いいよー!ガイアメモリっていうのは?」

有り体に言うと、『ガイアメモリ』は、地球の記憶を内包したメモリ

で、その記憶に対応した力を発揮するらしい。

「?なるほどな」

「あ、そうだ!どうせなら一緒に修行しないか!」

「なんでだよ!」

「だって、どうせドラゴンの力に目覚めたら裏社会に首突っ込まざるをえないからな!今から鍛えて全部叩き返せるようにしようぜ!」

「なるほど?よし!わかった!よろしく頼むぜ!イツセー!」

「よろしくな!匙!」

これが後に実を結び、この時の俺の修行を感謝することになるのは、またあとの話。

Side Red 切札の赤龍帝 切札の覚醒

俺、兵藤一誠がまだ小学生だったときの事だ。
ヒュウウウウウウウン?!

遠くから風切り音が聞こえてきたかと思うと
ガアアン!

と、爆音を立てて目の前に紫の流星? が落ちてきた

「うわあ!?!」
いきなりのことに驚きつつも、紫の流星の落ちてきたところを見る
と

「ゆーえすびーめもり?」

そこには黒く、クリアで「青銀色の端子」のゴテゴテしたUSBメモ
リがあった。小さかった俺は好奇心でそれを拾い上げ、

「うわあー? かつこいい! あ、スイッチがついてる。押してみよう」
スイッチを押した。すると

『J o k e r!!』

「じよーかー?」

小さかった自分には分からなかったが、J o k e rというのは「切
札」という意味の英単語だ。

「よくわからないけど、もってかえろー」

この時の俺はまだ知らなかった。この『ジョーカーメモリ』が俺に
齎すものを。

—————

そして、小学3年生の夏、悲劇は訪れようとしていた。俺は友達の
「コウタ」と一緒に隣町まで遊びに行こうとして、町外れまで行っ
た。すると、そこには

「あら? 可愛いニンゲンね。食べちやいたいくらあい」

上半身が裸の女性で、下半身がそのまま蜘蛛のような、化け物が

た。

「はぐれ悪魔?!?」

「は、はぐれ悪魔? コウタ、何か知ってるの?」

「はぐれ悪魔を知ってるのね? これはぱくぱく。しないかねえ!」

というど、化け物は掌をこちらに向け、魔法陣のようなものを展開、そこから糸を吐き出してきた!

「くそっ! 『Shield』!!」
堅くなる盾よ!

それにコウタは対応するように掌を前に突き出し、何かを叫んだと思ったら? 『銀に輝く障壁』が現れた

「魔術!? これはますます食べたくなっちゃったわあ?」

「不味い、不味すぎる?! くそっ! イッセー! お前だけでも逃げろ! 俺がここを食い止めるから!」

「ダメだよ! コウタだけ置いて行けない!」

「そんなこと言ってる場合じゃない! このままじゃお前も死ぬぞ! 俺が食い止めてるうちに早く行け!」

「ダメだ!」

「くどい! さっさと行け! 死にたいのか!」

「うっ?! (怖い、こんなコウタ初めてだ。でも!)」

「わかつたらさっさと」それでも、ダメ!」なあっ!?!」

「僕は、絶対に君を置いていかない! その上で、生き残る! コウタは僕を助けてくれた! だから今度は僕がコウタを護るんだ!」

『Wake up! Boosted gear!!』

『Joker!!』

その時、俺の覚悟に反応するように、2つの音が唸りを上げた。ふと、左手に違和感を感じて、見てみると

「なに、これ?」

俺の左手には赤い外装に金の紋様、髭のような黄色い追加装甲に、手の甲の部分に緑の宝玉が嵌った籠手が現れていた。

籠手を見た瞬間、これの使い方が頭に流れてくる。

『Joker! Joker!!』

「うわっ!」

そして、忘れるな。というようにもうひとつの音声も唸る。
見ると、ポケットからだ。

「これ、あのメモリだ」

これも、触った瞬間に使い方が分かった。

「ブ、赤龍帝の籠手は兎も角、ガイアメモリ、しかもT2でジョーカー
!? どういうことだ?!」

コウタは相手の攻撃を凌ぎつつも、俺の持つ物に驚いている。なん
で名前知ってるんだろう??

そして、コウタの言うとおり、これは神セイクリッド・ギア器? 神滅具ロンギヌス

『赤龍帝の籠手』そして、このメモリの名は『ジョーカーメモリ』

『今回の相棒は目覚めが早い様だな。俺の名はドライグ。赤龍帝ドラ
イグだ。よろしくな。相棒』

「僕は兵藤一誠。早速だけどき、神器って思いに応えるんだよね?」

『ああ。神器は思い次第でなんとでもなる』

「なら? こうも出来るはずだ」

俺は念じた。

赤龍帝の籠手にジョーカーメモリが装填できるようになれ。と。

生体コネクタがない以上、何かしらのコネクタはなければならな
い。

そこで神滅具をコネクタにすることに至ったわけだ。

存外、簡単にその改造は済んだ。

『Open, Gaia memory throat.』

「行くぞ?!」

『Joker!!』

『Load! Joker!!』

そうして、効果音と共に赤龍帝の籠手に紫のラインが走り、俺の身
体を強化する。

「覚悟しろっ!」

『Boost!!』

俺は倍加を開始しながら駆け出した。

「なっ?! 何やってるんだイツセー?! いくらジョーカーメモリと赤龍帝

の籠手があるからって突撃はっ?!」

そう、コウタの解釈は間違っていない。

基本ジョーカーメモリは俺に「戦い方」を教えてくれる。

身体を強化しつつ、最適な動かし方を教えてくれる。

しかし、それだけでは赤龍帝の籠手込でもこの悪魔を倒すに至らない。

ただ、それは『通常』の場合。この時の俺はコウタを助ける一心だった。

それによりジョーカーメモリの出力は倍増。通常のこの形態よりも段違いに強くなっていった。

『Boost!!』

俺は攻撃を避けつつ近づき、倍加のカウントを刻んでいく。そして、出力を増大させ、飛び蹴りをかます。

「きゃあああ!? な、なに? この力っ?!?」

「喰らえっ!」

『Joker!! Maximum Drive!!!』

『Transfer!!』

マキシマムドライブにより、エネルギーが解放。

更に、赤龍帝の籠手の『譲渡』により、更に力が倍増し、籠手に集まる。

「ジョーカーっ! ドラゴンインパクトォ!」

そうして振り抜いた拳からは赤紫の龍のエネルギーが溢れて、はぐれ悪魔を呑み込んで行った?

『Burst』

瞬間、俺も限界を超えて倒れたんだがな。

—————

そして、小学4年生、俺は『終生のライバル』に出会うことになる

まあ、その話はまたいつか。

転生者・竜胆琥太

おつす！オラ琥太！転生者だ！

？ホントだよ？

元々はただの高校生だったんだけどねえ？気づいたら死んでてさあ。今は『ハイスクールD×D』の世界で小学生なんてやってるよ。あ、そうそう。ちなみにイツセーの友達でもあるぜ！

転生特典は4つ決められたからとりあえず『魔術の才能、素養』、『ネギま！のネギの使用可能魔法全てをさせるように』、『ネギま！の闇の魔法使用権と闇の魔法との超適合』、『ネギま！の魔法道具一式と、それを呼び出す魔法陣(何度でも使える)』にしておいた。もちろんこの世界の魔術もガンガン使える。

これでも安心できねえってんだからおかしいよな。この世界。

高校になるまでには後ろ盾を作れたらいいなあ？

と、思っていたが、それでは冗長過ぎると、すぐに思い知らされることになったー

小三の夏。イツセーと遊びに行っていた時の出来事だ。

「あら？可愛いニンゲンね。食べちやいたいくらあい」

上半身が裸の女性で、下半身がそのまま蜘蛛のような、化け物ーはぐれ悪魔がいた。

「はぐれ悪魔?!」

「は、はぐれ悪魔？コウタ、何か知ってるの？」

「はぐれ悪魔を知ってるのね？これはぱくぱく。しないとねえ！」

はぐれ悪魔は掌をこちらに向け、魔法陣のようなものを展開、そこから糸を吐き出してきた！

嘘だろ?!原作前にこんな驚異に会うか?!普通！

「くそっ！『Shield』!!」

堅牢なる盾よ!

苦し紛れに詠唱を最低限まで削った障壁で防御した。

「魔術?!これはますます食べたくなっちゃったわあ?」

「不味い、不味すぎる?!くそっ！イツセー！お前だけでも逃げろ！俺

がここを食い止めるから！」

「ここでイツセーに死なれちや困る！主人公とか、原作とか、そんなんじゃねえ！友達だからだ！」

「ダメだよ！コウタだけ置いて行けない！」

「そんなこと言ってる場合じゃない！このままじゃお前も死ぬぞ！俺が食い止めてるうちに早く行け！」

「ダメだ！」

「くどい！さっさと行け！死にたいのか！」

はぐれ悪魔の攻撃に対処しつつ、イツセーと口論する。この頑固野郎め！

「うっ?!」

「わかつたらさっさと」「それでも、ダメ！」なあっ?!」

「僕は、絶対に君を置いていかない！その上で、生き残る！コウタは僕を助けてくれた！だから今度は僕がコウタを護るんだ！」

『Wake up! Boosted gear!!!』

『Joker!!』

その時、イツセーの声に呼応するように、2つの音が唸りを上げた。

さて、片方は兎も角、もう片方の音声はっ!?

「なに、これ？」

イツセーの左手には赤龍帝の籠手が顕現していた。ああ、早速原作崩壊かよ!?

『Joker! Joker!!』

「うわっ！」

そして、忘れるな。というようにもうひとつの音声も唸る。

いや、やっぱこの音声ってよ？

「これ、あのメモリだ」

やっぱガイアメモリかよ!?

「ブ、赤龍帝の籠手は兎も角、ガイアメモリ、しかもT2でジョーカー!?!?どうということだ?!?!」

はぐれ悪魔の攻撃は苛烈さを増してる。

やめてくれよお?まじで

『今回の相棒は目覚めが早い様だな。俺の名はドライグ。赤龍帝ドライグだ。よろしくな。相棒』

「僕は兵藤一誠。早速だけどき、神器って思いに込めるんだよね？」
『ああ。神器は思い次第でなんとでもなる』

「なら？こうも出来るはずだ」

イツセーが何かを念じたかと思うと、赤龍帝の籠手の先端が展開し、ジョーカーメモリが装填できるような形になった。

『Open, Gaia memory throat.』

「行くぞ?!」

『Joker!!』

『Load! Joker!!』

そうして、イツセーはジョーカーメモリを装填すると、効果音と共に赤龍帝の籠手に紫のラインが走る。

「覚悟しろっ!」

『Boost!!』

イツセーは倍加を開始しながら駆け出した。

って、はあ!いや、自殺行為だろ!いくら技能が上がっても、地力が!!

「なっ?!何やってるんだイツセー?!いくらジョーカーメモリと赤龍帝の籠手があるからって突撃はっ?!」

しかし、俺の予想は大きく外れることになる。

『Boost!!』

なんと、イツセーは攻撃を避けつつ近づき、倍加のカウントを刻んでいく。そして、出力を増大させ、飛び蹴りをかました!

「う、嘘だろ?!」

強すぎる?覚醒したのはほんとに今日なのか?!それとも、ジョーカーメモリとの適合率か?!

「きやああああ!?!な、なに?この力っ?!」

「喰らえっ!」

『Joker!!Maximum Drive!!!』

『Transfer!!』

マキシマムドライブにより、エネルギーが解放。

更に、赤龍帝の籠手の『譲渡』により、更に力が倍増し、籠手に集まる。

「ジョーカーツードラゴンインパクトオー！」

そうして振り抜いた拳からは赤紫の龍のエネルギーが溢れて、はぐれ悪魔を呑み込んで行った？

『Burst』

瞬間、イツセーも限界を超えたのか、倒れそうになる。

「危ない！『身体強化：最大加速Acceleration』!!」

体強化を施し、イツセーのところまで駆けつけ、受け止める。

「?これは、早急に後ろ盾を見つけないと」

グレモリー辺りか??いや、遅い。後ろ盾でないにしても、何かしらの協力者を立てたい？

「スラッシュドッグの事件に首突っ込むかあ??」

等と阿呆な事を考えるくらいには疲れていたようだ。

Iの覚悟／赤龍修行

神器に覚醒した日のこと、

――

「?ここは、どこ?」

目を開けると、一面焔に囲われた空間。

『ここはお前の精神世界、心の中だ。相棒』

「ど、ドラゴン!?!」

『そう、オレはドラゴン。しかも二天龍のうちの一体にして、
ウエルシュ・ドラゴン
赤い龍、赤龍帝ドライブだ』

「うえるしゅ・どらこん?」

『ウエルズの龍、という意味だ。俺の2つ名のようなものさ』

「なるほど?ねえドライブ」

『なんだ?』

「ドライブが僕の籠手に宿ったドラゴンなんだよね?」

『そうだが、それがどうかしたか?』

「僕に修行、着けられる?」

『修行だと?』

「うん、修行」

『何故だ?相棒にはジョーカーメモリなる力もある。しかもまだ子供だ。力がそこまで必要か?』

「必要だよ。僕は無力だ。琥太みたいに魔法が使える訳でも、裏の世界を知ってる訳でも無い。だからこそ、必要なんだ。力が」

『成程な。どちらにせよドラゴンは戦いに身を窺す運命にある。なればこそ、力を手に入れる必要はある。か』

「うん。なにより僕、ただの人間だからね」

『よし、良いだろう。ならば俺が具体的なトレーニング方法を教えてやる。現実に戻ってノートと筆記用具を持って待っている、相棒』

「というので、戻って少し待つと」

『出来たぞ。相棒』

左手の甲で丸い緑の光が点滅したと思うと、そこからドライグの声が聞こえて来た。

「うわっ！ドライグ、そのままでも声出せるんだね」

『言っていないなかったか？まあいい、今から言うからきちんとメモをするように』

ドライグの言うメニューは、こうだ。

・準備運動

ランニング30分

ダッシュ2本

腕立て伏せ15回

腹筋15回

背筋15回

スクワット15回

・本題

正拳突き50回

蹴り50回

ジョーカーメモリ装填後、力の流れを掴む

赤龍帝の籠手によるブースト

・クールダウン

ストレッチ

ランニング10分

『平日は少し短縮するとしても、休日ならばこうだろう』

「ふむふむ？」

かなり辛いけど、これを熟し続ければ、力になりそうだ。

『ただ、相棒のメモリ？だったか。あれには多少なりとも毒性がある。

赤龍帝の籠手で毒性をある程度打ち消して居るが限度もある。後ろ

盾が出来たらその技術者に専用装置を作らせるのもありだろう』

「え！？毒あるの!？」

『多少、だ。相棒はメモリとやらと相性が良い様だからあまり心配はないがな。むしろ赤龍帝クラスになればこの程度の毒素ぐらい意にも介さないさ』

「ほえー？頼もしいね！よし、早速修行だー!!」

――
裏山にて

『よし、準備運動はこれくらいでいいだろう』

「はっ？はあはあ?!す、すごい疲れるね、これ」

『ふ、初日だからな。さあ、赤龍帝の籠手を展開し、スロットを解放しろ』

「了解！」

『Open, Gaia memory throt.』

『Joker!!』

『Load Joker!!』

瞬間、紫のラインが走って、強化が施される。

『いいか、相棒。最初にリンクした時、この状態はジョーカーメモリの
上澄みを回したに過ぎない事が分かった。この力をより深く引き出
すんだ』

「より、深く？」

『そうだ、ただ使うのではなく、より深くこの力を馴染ませるんだ、相
棒』

「わかった？」

心を落ち着かせる。

より、より深くこの力を欲する。

赤龍帝の赤い力じゃなく、ジョーカーメモリの黒紫の力。

雷電の様な激しさと、流水の様な柔らかさが両立した力。

力の表層じゃない、赤と混じった力よりも、もっと深くの純度の高
い黒紫の力。

『Joker!!』

紫のラインが、増えていく。

籠手を超えて、身体に染み渡る。

紫のラインは量を増したかと思うと、今度は紫のラインから黒い
オーラが噴出する。

黒いオーラは鋭さを増し、黒い鎧となって身体を包んでいく。
頭部を覆ったオーラは、道化のようで、瞳部分の赤いマスクとなつて、結実する。

『Joker Dopant!!』

『? 凄い、力が溢れてくる。これが?』

『そう、これがドーパント。ガイアメモリの力を引き出した状態だ。ここから素振りに行くぞ!』

『了解!』

瞬間、正拳突きを行う。そして、愕然とする。

『す、凄い。何時もよりも体が動く。正拳突きも、何時もより強く、早い』

そのまま、ロー、ハイ、回転と蹴りを続け、ストレート、フック、アツパー? どんどんと技を続ける

『相棒、今度は赤龍帝の籠手だ』

『了解』

そして、ジョーカーメモリを排出。その後赤龍帝の籠手の効果を起こす。

『Boost!!』

10秒して、

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!! Burst!』

「oooooooooo!!!?」

バースト、の音声と共に、身体に言い様のない負荷がかかる。成程、今の状態では8倍が限界のようだ。

『まあ、最初のうちはこんなものだろう。次は赤龍帝の籠手とジョーカーメモリの両方を使用した上での計測だ。相棒』

「了解!」

赤龍帝の籠手の機能を解放し、ジョーカーメモリのボタンを押す。

『Open, Gaiamemory throat.』

『Joker!!』

そのままジョーカーメモリをスロットに装填し、力を同調させる。

『Load Joker!!』

『Joker Dopant!!』

すると、僕はジョーカードーパントのまま、赤龍帝の籠手を装着することが出来た。

『よし、倍加開始ッ!』

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!!』

『Boost!! Burst!!!』

『~~~~ツ!』

バーストした瞬間、ドーパント状態が解除され、そのまま膝をついて倒れた。

「な?なんだ、これ?ツ!?疲労感がツ違い、過ぎる?!」

『ジョーカーメモリの負荷と赤龍帝の籠手の負荷の相乗だろうな』

「?こればかりはトレーニングだな」

『継続は力なり。だ相棒!』

「おう!」

よーしっ!頑張るぞ!

『そうなのか・・・』

「よっし！やるぞー！やってやるぞー！出来なくてもやる！出来ないのが道理なら道理の方からぶっ飛ばしてやるぜえええー！」

『えええええ・・・』

その思いを知ってか知らずか。

『あれ？意外と行けるかも？』

「ホントかヴリトラ!?っしやあー！やってやるぜえー！」

イメージするのは変身した自分！憧れ続けたヒーロー達の背中だ！

『X・・・XX Xt・・・Xtreme!!!』

瞬間四肢から邪炎が吹き上がる。

アブソルフュジョン・ライン

『黒い龍脈』からラインが出現し、全身を包み込む。

ラインがやがてスーツのように全身にまとわりつき、邪炎がその上から鎧になっていく。

「変ッ・・・身！」

瞬間、焰は結実し新たな姿へと変わった。

黒い艶消しのスーツの上に、黒く輝くヴリトラを模した鎧が形成される。胸部にはヴリトラの顔を模した様なパーツが付き、その下に宝玉が着いている。

『V r t r a X t r e m e D r i v e ! 』

『うお!?え!?もしかして禁バランス・ブレイカー手とかいうやつ?』

『違うぞ相棒。恐らくあれは神器の性能をオーバードライブさせたものだ。しかし、エクストリームメモリの性能故か、負担があまりかかってないな』

『っしやああああ！やったぜ！』

『なんだこの我が分身（震え声）』

拜啓、親友親友殿。

どうやら匙は思ったより脳筋タイプのようなです。

『いやまあ、エクストリームメモリの性能的には、相性抜群なんじゃないか?』

というドライグの声に、

『いやー、相性良すぎても困るよ』

特に俺たちの心労が。

と、思わず返してしまった。

別の日のこと

「実践的な修行？」

『ああ』

「どうやって？」

『はぐれ悪魔狩りだ』

「大丈夫か？それ」

『バレやしない。はぐれ悪魔は依頼が無いと討伐されん。依頼自体、場所がわかってない事やフラフラしてることが多い。死んでも死んでたと報告されるだけだ』

「ほえー」

ならいいか。

『それに、はぐれ悪魔が居ると人が餌食になる。相棒は嫌だろ？』

「ああ。絶対にやだね」

『相棒ならそう言うと思っていたよ。オーラは俺が掴む。行くぞ』

「了解」

『あ、ヴリトラの小僧も呼ぶぞ』

「匙も？」

『ああ。ドラゴンの神器を得た以上、力がなければ死ぬだけだからな』

「・・・それもそうかあ」

そして、1時間後。

「来たぞー」

「おう。さんきゅ、匙」

『さて、今回だが、はぐれ悪魔がいるのは駒王の端の廃工場だ』

「彼処か・・・」

「あそこの近くでよく人が消えるから近づくなーってよく言ってたよな」

「はぐれ悪魔が原因だったのか・・・」

ふっふっ、と怒りが湧く。

「俺たちの町でよくもまあ」

「・・・絶対許さねえ」

廃工場まで、全速力で走った。

廃工場にて

「匙」

「なんだ？」

「ガイアメモリは準備しとくぞ」

「勿論だ」

『Joker!!』

『Xtreme!!』

『Open, Gaia Memory throt!』

『Load!!』

『Joker!!』

『Xtreme!』

そして、廃工場の扉を開くと。

そこには

「あらあら、ボクちゃん達ここに来ちゃダメって言われなかったのお

「？」

女性が、居た。

「ボクちゃん達も、こうなっちゃうわよお？」

背後に屍の山を築いた、下半身が蠍の、異形の女性が。

「おい」

「なあに？茶髪のボク」

「それやったの、お前か？」

「そうよ。ワ・タ・シ♡ボクたちも直ぐに連れてってあげるわあ」

そして、女性は針を俺に刺そうとして。

ガシイッ！

「なっ！」

俺の左手に、抑えられていた。

「死ぬのはてめえだ。はぐれ悪魔」

そして、次の瞬間。

「ギイイイイイ!?!」

邪炎が女性を襲った。

「お前に消費された命の分、しっかりと贖ってもらおうぜ？」

『Joker Dopant!!』

『Vrtra Xtreme Drive!』

ああ、酷い気分だ。

悪い夢を見ているようだ。

『Boost!Explosion!!』

『オオオオオラアア!!』

「ギャアッ!?!」

黒い道化師の拳が、私の下半身の外殻を砕く。

『燃えろッ……!』

黒い焔が、私を襲う。

「あゝあゝ ああっ」

なんで！なんでよ！せつかくあのいけ好かないカスから搾り取るだけ搾り取って殺して逃げられたのに！

なんであたしがア！

こうなれば――！

「離れろおおおお！」

オーラが弾けて、俺たちを飛ばす。

「よくも、よくもよくもよくもおおお！クソが！^ゴ下等生物^ミの分際で！餌の分際でよくも私にいいいい！」

すると、女性は

『な』

『あれは』

ガイア、メモリ――？

『Scorpion!!』

骨のような造形のガイアメモリが音声を鳴らして、

「がぁ、ああああ!!」

『うえっ』

『うわぁー・・・』

女性が、ガイアメモリを飲み込んだ。

そして、体に変質して――

女性は、人型の蠍とも言わうべき異形へと変質した。

『なんだよ、あのメモリは』

『それは後だ匙！あいつを倒すぞ！』

『お、おおー！』

『――キヒ、キヒヤヒヤハハハハ！殺ス殺ス殺ス食ウ食ウ食ウ――キヒヤア！』

そして、蠅——スコープオンドーパントが俺に飛んできた。

『甘いんだよ!』

しかし、拳がスコープオンの顔面を殴り飛ばす。

『ギ!?!』

そう、相手がドーパントになろうが、関係無い。

こいつは、俺たちの町を脅かした。

俺たちの日常を汚した。

それだけは許さない。

そう、

『お前がなんになろうと、俺達はお前を赦さねえ』

町を泣かせるヤツらは、俺のこの手で打ち砕く。

俺達が笑顔で暮らせるように。

父さんが、母さんが、俺の周りの全ての人が、

きつと笑顔で、暮らせるように。

笑顔を踏み潰す、全ての『悪』を破壊する。

『そういう事だ——くらいやがれえ!』

匙はラインを伸ばし、スコープオンドーパントに巻き付けて、投げ飛ばす。

そして、そのまま邪炎を放って火達磨にする。

『ア、アアアアアア、ア、ア、ア!!』

邪炎が相手を呪い、焼いて、損耗する。

そして、消耗が激しくなるか、という所で、

『なめるなああ!』

魔力を放って無理やり呪いを外す、が

『舐めてたのはお前だろ?』

『Explosion! Joker Maximum Drive
!!』

都合1分、6回の倍加の果てに、ジョーカーメモリのマキシマムドライブを発動させる。

オーラ全てを拳に集中させ、

『おおおおおおお!!!』

スコープオンダーパントに叩きつけた。

『ギイイイイアアア!!!』

瞬間、スコープオンダーパントは爆散し、はぐれ悪魔も、塵へと還った。

現場に、壊れたガイアメモリだけが残った。

『———なにが、起きてるんだ?』

謎のガイアメモリ、明らかにおかしい様子だったはぐれ悪魔。

何かが、確実に胎動している。

崩壊のP／世界は悪意に満ちている

——平和とは、薄氷の上に映る虚像である。

「ここが、駒王町かア」

——尊く儂いものであるからこそ。

「ぶっ壊しがいがありそうだ」

——壊れるのは一瞬なのだ。

『Violence!!』

『ヒビッ、ヒヤヒヤ、ヒヤーヒヤッヒヤッヒヤッ！ぶっ壊してやるぜ！
平和ボケしたクソカス共オ！』

——一誠と匙は、鍛錬も兼ねて学校の裏山を木々の間を飛びながら散策
していた。

そんな折、

「——なんか聞こえないか？匙！」

「んんー、そうだな。なんか音がしてる」

「ミシミシ。バキッ！という音。

「なんか居るのか？」

「気になるな。見に行こうぜ！」

「おうー！」

そのまま軽やかに二人は木々を飛び、音のする方向に向かって行った。

しばらく飛ぶと、そこには

「なっ——!?!」

「うそだろ・・・!?!」

目が無く、歯がむき出しの頭部。
筋骨隆々で鉄板が刺さった身体。
鉄球になっている左手。

端的に言ってマトモではないその様相は間違いなく
「ドーパント・・・!?!」

そう、そのドーパントが、木々を薙ぎ倒し、道を拓いている。
何の為に・・・?それは分からない。分からないがしかし。
怪しすぎる。あまりにも。

『——アア?見られちゃったなあ?まあいいわ。死ねえ!!』
そのまま、鉄球を振りかぶってきた。

「うっそだろオイ!?!」

『Boost!Explosion!!』

即座に力を倍加、解放して籠手越しにガードする。が

ゴツツツツツ!!!

「ギツ…!!!」

吹っ飛ばされる。でも、ただでは終わらない!!!

『Joker!!』

『Open, Gaia Memory throat. Load!』

『Joker!!!』

『Joker Dorpant!!』

『Boost!!』

即座に全身を紫のラインが覆い、身体を道化師の如く変成させる。

「イツセー!!大丈夫か!？」

「大丈夫だ!サジ!お前も早く!!」

『死ねえ!!!』

『Vrtra Xtreme Drive!』

瞬間、ドーパントの鉄球を黒炎が押し退ける。

『うおっ!?!なんだこりゃ!』

『あつぶねー!!!サンキューヴリトラ!』

『全く。我が分身は危なっかしい』

イツセーはサジの元に戻って、

『おい!お前は何か目的だ!!!』

『あーん?目的だア?そんなもん決まってるだろ!!破壊だよ破壊!!!!!!
の先にある駒王町を破壊するのが俺たちの目的だ』

『は?????』

『Boost!!!』

その言葉に、イツセーとサジは激怒した。俺たちの街を破壊する???

急に現れてゲラゲラ下品に笑いながら??そんな事

『許せねえ……!!!』

瞬間。ドラゴンの激情に釣られて龍のオーラが溢れ出る

『おいおい。ドラゴン系神器持ちのガキがオリジナルのガイアメモリ
ユーザーかよ。肩慣らしにやあ景気が良すぎんだろ!!!』

すると、ドーパントの身体から闘気が溢れる。

『おい相棒。サジ。気をつけろ。あれは闘気。魔力では無いがあれを
纏った鉄球の一撃は、今の状態でもかなりキツイ』

『了解』

『Boost!!Explosion!!!』

そして、イツセーは己の激情に従い、溢れるオーラと共にバイオレンスに殴り掛かる。

サジはラインをバイオレンスに伸ばして闘気を吸収する。

『しゃらくせえんだよお!!!』

バイオレンスは鉄球を振りかぶるが

『フツ…!!』

手をコロのように転がして鉄球をオーラごと流す。

『なあっ!』

そのままの勢いで踏み込み、一撃。

ドゴツ
!!!!!!!

『ガツ…!!!』

『追い打ちだ』

ブレイズ・ブラック・フレア
邪龍の黒炎でバイオレンスに追撃の炎を与える。

『ぐうおおおおお…!!!陰湿な真似をオ!!!!!!』

バイオレンスは鬨気を解放して無理矢理解呪した。

『そんな不用意でいいのか???』

『何言ってやがる。まだまだ鬨気は——っ?』

バイオレンスは急に体制を崩した

『消費が…激しい…?馬鹿な。そんな量は出して…まさか!!!』

バイオレンスはさらに力を込めると

『これは…!!!』

隠蔽されていたラインが姿を表した。

『小癩な真似を!!!!!!』

バイオレンスは鬨気をみなぎらせてラインを引きちぎった。が

『不用心すぎるぜ?』

側頭部にイツセーの回し蹴りがぶち込まれる

『おっ…!?』

そして、サジと同じところに着地し、解放。

『Explosion!!!』

『決めるぞ。サジ』

『おう!』

そして、黒炎の鎖がバイオレンスを拘束する。

『くそっ!!!おい!離しやがれ!!!おい!!!』

闘気とフィジカルで乗り越えようとするが、無駄である。あの黒炎は吸収した闘気から闘気吸収の能力を得た今だけの特別製だ。

イツセーは左足にジョーカーのエネルギーを。サジは右足に黒炎を纏い。空高くジャンプする

『くらいやがれええええええええええ!!!』

ダブルライダーキックとも言うべきそれは的確にバイオレンスをぶち抜き――

『がっ…あ…』

メモリブレイクに持ち込んだ。

『ヤーてと』

『しっかり話を聞かせてもらおうじゃねーの』

2人はそれはもういい笑顔だったという

Side Whiteー永遠の白龍皇ー
少年少女、邂逅す。

ーーーどこかの研究所

巨大なフラスコの中に存在する少女を、鈍い銀髪の青年が一瞥する
「出来た……！やつと出来たぞ!!ホムンクルスが!!!キヒヒヤハハハ
ハハ!!これで、これで!!愚かな悪魔に鉄槌g」

スパン、と、青年の首が突如として切り裂かれ、あつけなく絶命する。
青年の体が倒れると、黒いローブの何者かが現れる

「……………邪悪な研究が行われていると聞けば、まさかホムンクルスとはな。
仕様がな、あの神器オタクの所にでも送るか」

『神の子を見張る者』本拠地にて

「総督、転移魔法反応です!!」

「なっ!?!この魔法陣は、アイツの!?!」

「?これは」

現れたのは、白いワンピースを着せられて横たわっている七歳程の
少女だった。上に紙が置かれている

「ん?」

紙には

この娘はホムンクルスだ

名前がないのでアリア・エーベルヴァインとかいいんじゃないか?

こいつの面倒を見てやってくれ

と書いてあった

「事前連絡位しろあの野郎……………!!?」

と、そんな時

「あなたは……………?」

「と、目が覚めたか。俺はアザゼル。墮天使の総督だ」

「あざせる、さん」

「お前、名前はあるか？」

ふるふる、と、少女は顔を横に振る

「なら、今日からお前は」

「……アリア、アリア・エーベルヴァインだ」

「……はい！」

少女は、万感の思いを込めて、答えた

「……」

俺こと、ヴァーリ・ルシファアは『神の子を見張る者』に引き取られて幾日か経った頃、アザゼルが「そろそろ顔合わせしても良いだろう」と、いう事でアザゼルに連れられ、幹部の墮天使達と会った。

……しかし、墮天使の幹部はあれでいいのだろうか……？

「……お、着いたぞ。ヴァーリ」

「……は？」

「開ければ分かる」

ニヤニヤ、と笑う様子が気に入らない。蹴っておくでしょう。

「痛あ!?ヴァーリ!お前脛を蹴ったな!」

「……ふん」

と、キレルアザゼルの尻目に、俺は扉を開けようとする、ガシユウ。と、先に扉が開いた。

「うるさいですよアザゼル総督。……?ねえ、銀髪の君。君の、名前は？」

そこから出てきたのは、絹のように美しい白い髪と、紅玉の様な輝きを持つ赤い瞳の少女だった。

「ヴァーリ、ヴァーリ・ルシファアだ」

「ルシファア……?魔王の?」

「ああ。それより、俺はお前の名前を聞いてないぞ?」

「私はアリア、アリア・エーベルヴァインよ。あ、アザゼル総督。ヴァーリ君って何歳?」

「お前の三つ下の六歳だ」

「そうなの!?なら、ヴァー君ね!」

「なっ!?」

「なんだその呼び名は!」

「……嫌?」

「うっ……そんな顔をされると、断れない。」

「……ヴァー君でいい」

「うん、よろしくね!ヴァー君!」

さて、これからどうなることやら……

「あ、アリアとヴァーリは今日から同じ部屋な」

「おいちよつと待てどういう事だ説明しろアザゼルウウウウウウ
!?!」

「だってよお。俺も忙しいし。かといって、お前らをほっとくわけにもいかないだろ?だから、同じ部屋に住んで仲良くなって、ついでに一緒にいてくれたら面倒も見やすいからな。アリアは嫌か?」

「ううん、いいよ!弟が出来たみたいで嬉しいし!!」

「なあっ!」

「ヴァー君は、やなの?」

「嫌というわけでは……」

「じゃあいいよね!」

「そうだな!」

この後、俺の必死の説得も虚しく、アリアと相部屋になった。

「ヴァー君!好き嫌いしちやダメ!」

「嫌だ。なんでこんな苦みの塊ピーマンなんかを食わなければならぬ……!」

「ピーマンを食べなくたって死にはしないだろう!」

「いいから食べなさい!それとも、ピーマンも食べれないおこちやまなの!」

「なんだと?いいだろう、ピーマン位幾らでも食べてやる!」

俺がおこちやまで無い事を証明してやろうじゃないか!

「その調子だよヴァー君！」
うっ……やっぱりにがい。

「ヴァー君、お風呂入るよ！」

「はあ!?ちよつ、待て！」

羞恥心が無いのかこいつは!?

「いいからゴー!!」

「うおおい!？」

どうにか振り払って駄目だこいつ力強い!お助けええええええ!!

「ヴァー君、一緒に寝るよー!!」

「オイヤめろ抱き着くんぐぼあー!」

鳩尾がつ!

「すぴー……」

「寝るの早いな!?……思えば、こんなに騒がしい一日なんて、アザゼル以外とは初めてだ」

俺の鳩尾に頭をグリグリと押し付けながら眠る年上とは思えない少女。

張り詰めていた俺の心を解きほぐしてくれた明るくも不思議な少女。
よくわからない感情が胸に広がって行って、思わず

「……ありがとう、アリア」

感情が、言葉としてあふれ出た。

この感情の答えは出ていない。

だが、この少女に恩返しする為に、せめて、せめて、この日常を守れるぐらいには強くなってみせる!

「さて、アリアとヴァーリはもう寝たか?」

アザゼルは、二人の様子を見るために部屋を覗くと、

「……随分優しい顔するようになったなあ、ヴァーリ」

ふと、優しい笑顔を浮かべた。その先には、ヴァーリに抱き着きながら眠るアリアと、それを受け止めながら、穏やかな表情で寝ているヴァーリが居た。

「さて、明日からかつてやるとするか♪」

次の日の朝、今日の事をからかうアザゼルと、それに怒って殴りかかるヴァーリがいたそうだが、それはまた別のお話。

龍皇少年、永遠を掴む／人造少女は幻想を得る

—————

それは、俺がまだ9歳ほどの時のことだ。

ある日、俺は『神の子を見張る者(グリゴリ)』の拠点から少し離れた中庭で軽く修行をしていた。そんな時

ヒュウウウウウウウン?!

遠くから風切り音が聞こえてきて

ズボツ!

白い塊が地面にめり込んだ。

「なんだ?これは」

『気をつける。ヴァーリ。なにか良くないものかもしれない』

興味本位にめり込んだ白い塊を掴むと、

「なんだ?この小箱のようなものは。スイッチが着いているな。押し
てみるか」

『E t e r n a l!!』

『ドライブ!いい、いや、声がそっくりなだけか』

「ドライブ?なぜここで赤い龍が出てくる?」

『ドライブの声も、これと同じなのだ』

「なるほどな。?しかし、これの用途がわからん。アザゼルに渡すか
?」

『それも有りだろうな。分からないままでも気分が悪いだろう?』

「ああ」

—————

『神の子を見張る者』は研究室にて。

「アザゼル」

「お、ヴァーリか。どうした?」

「これ、何か知らないか?」

『E t e r n a l!!』

俺はこの白いヤツのボタンを押しつつ、アザゼルに聞いた。

「うおっ!?!なんだ?それ」

「わからん。いきなり目の前に落ちてきた」

「そ、そうか？わかった。俺の方で調べておくからエリアと遊んでくるか修行でもしてるかい」

「わかった」

—————

そうして、ヴァーリが部屋を出た後。

アザゼルはエターナルメモリに様々な器具を取り付け、端末で情報を閲覧していた。

「これは、このUSBメモリには地球の記憶その物が入っているのか!?しかも、これを使うためにはメモリに認められる必要がある？ヴァーリは目の前にこれが落ちてきた。と言っていたな？適性がヴァーリにあったということか。しかしこのガイアメモリとやら、かなり応用が利きそうな技術が詰め込まれてやがる。これがあれば人工神器の研究も捗りそうだ。？そうだ、どうせならこいつを最大限に使用できるデバイスを作ってやろう。ヴァーリの力になってくれる筈だ」

アザゼルはそのままメモリの端子部分を見つつ、端末を弄る。

「ここには処理が施されていて、適切な物でなければ出力しないようになっているみたいだな？しかしのメモリは武器、というよりは鎧のような物にする為にベルトにするか??夢が広がるなあ」

そうして、アザゼルはまた端末を弄り始め、データ収集に入った

—————

それは、私が12歳の時のこと。

私が学校から『神の子を見張る者』に戻ろうとした時。

パシユウウウウ!!

と音を立てて目の前に黄色い光が飛んできた。

「これは、USBメモリ?にしてはゴツいけれど?スイッチが着いているわね。押してみましようか」

『Luna!!』

「ルナ??ローマ神話の月の女神かしら。でもなぜ??分からないわね。アザゼル総督に頼むことにしましょう」

『神の子を見張る者』研究室で。

「ただいま帰りました。アザゼル総督」

「おお、アリアか。おかえり」

「ねえ、アザゼル総督。これを知っていますか？」

『Luna!!』

「それ、ガイアメモリじゃねえか！」

「がいあめもり？やっぱり知っているんですね」

「ああ。こいつは地球の記憶を閉じ込めた装置だ」

「地球の記憶??随分と壮大な？」

「まあ、研究途中だがな。実用化できたらこのメモリごと渡すから、借りてていいか？」

「どうぞ。どうせ使い方もわかりませんし」

「ありがとうございます」

「あ、それでは私はここで失礼します」

「おう」

—————

アリアが去った後、アザゼルはルナメモリをエターナルの時と同様に器具を付けて情報を閲覧していた。

「うーむ？これは、ルナメモリは『幻想』か。これならむしろ単体ならドライバーを経由するよりアリアの『神器』に直接装填させた方が早いだろうなあ？」

と、言いながらパソコンを打ち続け？

「しかし、そうなると毒素が心配だな。安牌はベルト？か。ただ、ルナメモリは出力が小さい？と言うよりは能力特化。尚の事ベルトでの単体出力では力を出し切れるとは言い難い？専用のアダプタでも作るか？」

カタカタとパソコンを打ちつつ、あーでもない、こーでもないパソコンを弄る。

「やばいな、楽しくなってきたぞ?!」

と、ハイテンションで研究室に籠り続けた結果、二徹目位でアリア

とヴァーリが突入し、そのまま無理矢理ベットに叩き込んだのはまた別のお話。

結果として、『エターナルメモリ』の端末として『ガイアメモリドラマイバーVer. 1.0』が、『ルナメモリ』の端末として『ガイアメモリアダプターVer. 1.0』が完成する運びとなった。

人造少女とラーメンと

ある休日の朝、ヴァー君が出かけた後、私はアザゼル総督と通信していた。

「はぐれ悪魔の討伐？」

『ああ、本来なら悪魔側の領分なんだが、そのはぐれ悪魔が、俺たちの研究している『人工神器』セイクリッド・ギアの研究成果を盗んで使用してるみたいでな。その尻拭いとして』

「私が抜擢されたと」

『そういうことだ。行つてくれるか？』

「いいですよ。では、行つてきます」

『わかった。無事に帰れよ？』

「それは勿論」

『ならいいんだ。座標は————だ』

「了解しました。では、転移」

——とある廃工場

「——貴方ね？ 私たちの、『神の子を見張る者』の研究成果を盗んだはぐれ悪魔、ヴァルザードは」

そこに居たのは、鈍い金髪にメガネ、白衣が特徴的な青年だった。

「ええ、そうですよ。小さなレディ？」

「なら、討伐させてもらうわ」

私は神器、『呪怨の鎌』を展開する。

『呪怨の鎌』……確か、攻撃時にランダムでデバフを付加してくる厄

介な神器でしたね、なら——」

「起動、傲慢領域」

面倒だから相手が何かしてくる前に『傲慢』の力（相手の異能を掻き消す能力。打ち破るには圧倒的なオーラか、禁手に至るレベルの思いが必要）で相手の異能を掻き消す。

格上には通用しないから、相手が格下（最低でも出力は）でよかつ

たよ。

「なっ!? 神器が! 魔力が! 発動しない!? 何ぞ「せいっ」ぐはあ!」

取り敢えず鎌で切り裂いて、

「起動、怠惰、付加——アクティブ スロウス エンチャント——怠惰の掌底!」

掌底に『怠惰』の力(『動き』の減速)を付加させて打ち込み——

「——バランス・ブレイク禁手化」

禁手で終わらせた。

報告の為、アザゼル総督に通信を入れる。

「——終わったよ。アザゼル総督」

『やっぱりお前の『力』と相性が良かったか』

「そうだね。実際滅茶苦茶楽に終わったよ」

『そうか、そういうえば、ヴァーリもさつき仕事が終わったようだから、一緒に飯を食ってきたらどうだ?』

「うん、そうするよ。またね。アザゼル総督」

『おう』

「さて、行きますか」

——どこかの町にて

「ヴァー君、今日はラーメンにしようか」

「珍しいな。何時もなら『外食なんていけません!』とか言うのに」

「嫌なの? ならやめてもいいんだけど」

「よし今すぐ行くとしよう!」

「現金ねえ……」

「偶にしか行けないからな! これを逃したら次は何時になるか!」

「一人で行ってもいいのに……」

「家族と行くのは少ないだろう?」

—— ツ!!う、嬉しい事言ってくれるじゃないの、ヴァー君!

「……生意気ね」

「顔が赤いぞ?」

「煩い、本当に外食やめようかs」やめてくれ!」なら最初からからかわないの」

「俺は本気で言っただが」

「えっ」

「本気で言っただが」

「なっ、ななな、なっ——」

顔が火照る、やばい、駄目だ……!!今見られたら、姉としての威厳が……!あ、でも、ヴァー君ならって何を考えてる私いいいいいいいい!!?

「顔が熱いぞ?熱でもあるのか?」

おいちよつと待ておでこくつつけるな心臓に悪いからやめろくださいなんでもしますからあ!?

「——!!」

私の頭はショートして、意識は闇に沈んだ。

最後に、ポカンと呆けた顔のヴァー君を視界に写して

ふと、目が覚めると、

「起きたか」

「うん……ごめん」

膨れっ面のヴァー君が居た。

うう、恥ずかしい……

「とりあえず、一緒にラーメン屋行くから許して?」

「……今回だけだぞ」

「ありがと、ヴァー君」

「ふん……」

「おいしいねえ」

「そうだな」

二人で食べる味噌ラーメンは絶品でした！

S i d e B l a c k ー幼き魔法使いと牙持つ墮天の狗神ー

琥太、狗神と出会う

俺こと竜胆琥太はヘヴンリィ・アロハ号の事件を見て、学校を魔法人形に任せて幾瀬鳶雄達が巻き込まれるであろう事件の舞台へと向かっていた。

取り敢えず、このままでは補導される事間違いなしなので、年齢詐称薬で誤魔化すことにする。

「しかし、何時巻き込まれるかわからないからなあ？長期戦になりそう？か」

幾瀬鳶雄に会えば早いんだが。覚醒後じゃないとロクなことにならんからなあ？そこも考えんと。

「更には転生者も居そうだからなあ？変な波風を立てる部類の」

まあ、俺も人のことは言えないから何とも言えないけど。

「(〇〇はオレの嫁！系じゃないといいなあ。居ても。の話だけど) あー、ゆううつ」

さあーて、探索開始だ。

ー

探索して数十分

「いや、見つけたけどさ」

まさかこんなにウツセミに囲まれてるとか思わんだろ!?

「取り敢えず？この世界の魔術でもいいけど？出力メインならネギま！の方がいいな」

そのまま魔力を身体に回し、跳躍。そのまま、遅延呪文^{デレイ・スベル}を解放する

べく鍵言を言う

エーミツタム

「解放!!」

ー

俺、幾瀬鳶雄は夏梅さんと、ラヴィニアと街中を探索していた。す

ると

「?見つけた」

「?見つけた」

「?見つけた」

「ちよ、ちよっと!多すぎやしない!」

「どんどん増えてきているのです?面倒なのです」

「これはまた?面倒だな?!」

多くのウツセミに囲まれ、ジリジリと距離を詰められつつも、戦闘準備を整え、戦おうとした、その時。

『ヨウイス・テンバスターズ・フルグリエンズ雷の暴風』

雷のような、暴風のような輝きが虚蟬を吹き飛ばした。

「これは、魔術のですか!」

雷の吹き飛んできた方向を見ると、そこには黒髪の青年が居た。

ラヴィニアはウツセミを制圧しつつ、青年に声をかける

「貴方は何者なのですか?見たところ、協会の者では無いようですが」
「ただのお節介だよ。困っていたようなのでね。しかも、この人の殻は一般人の様だからね。裏の者として、表の者に危害を加える輩は粛清しなければならぬ。こちら側の外にしかならないからね」
なるほど、筋は通ってる。けど

「?信用出来ないのです。話が美味しすぎるのですよ」

「まあ、妥当。というか良い判断だと思うぞ?俺も自分で馬鹿だなあ。と思ってる。まあ、実際は後ろ盾が欲しいだけさ。裏に入って少ししか立っていなくてな、何かしらの後ろ盾を得ようと思ったら、ここがハイエナ出来そうだったんでな。筋の通ってそうな方を。と思つてそっちを選んだんだ」

青年は向かってくるウツセミを一撃で消し飛ばしながら答えていく。

?桁違いだ。文字通り。

「さて、ゆつくり話がしたいし、そろそろ終わらせよう。『エイミツタム解放』っ!

『サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス魔法の射手・光の116矢』!!」

瞬間、輝きが瞬き、幾つもの光条が全てのウツセミを消し飛ばす。

「申し遅れた。俺は竜胆琥太。宜しく頼む」

一瞬で全てを終わらせた魔法使いは、なんでもないように俺たちに笑いかけてきた。

そして、ロビー

—————

「まあ、今更見栄を貼ってもしょうが無いな」

と、俺は年齢詐称薬を解除し、元の姿に戻る

「こ、子供!？」

「え!?嘘?!さつきまで?」

「ヴァー君くらいの子供なのですね?」

おお、驚いてる驚いてる

「まあ、子供がこんなところぶらぶらしてても怪しまれるどころか補導されますし」

「でも、親御さんが心配するんじゃないのか?」

「そこはもう対処済みですよ」

というか、俺に親はいない。

2年前に『交通事故に巻き込まれて死んだ』という事になっているし、怪しまれもしない。

魔法使いだった両親が手を回してくれたお陰だ。

楽なものだ?寂しくはあるが。

「まあ、ぶっちゃけた事を言わせて頂くと、俺は後ろ盾が欲しいんです。まあ、後ろ盾。というか関わりですね」

「関わり?ですか」

「ええ。俺はつい2年前にはぐれの魔法使いだった両親が亡くなりまして。それだけならまだ関わりを持つ必要はなかったのですが、友人が神器の所有者で、かつはぐれ悪魔に襲われてから覚醒してしまっています?。」

「な?っ!なるほど、それで、関わりを持ちたい。と思ったのですね」

「まあ、そんなところです」

「それで、その友人の神器はなんなのですか?」

「申し訳ないですが、教えられないです。まだ関わりを持たれた訳ではありませんし、なによりかなりのビッグゲームなものですから」

「そうですか？わかったのです。では、関わりないし、後ろ盾の件は総督に必ずお伝えするのです。安心して欲しいのです」

「ありがとうございます」

第一関門？クリアだっ！

「あ。そういうえば、今回の件ですが、首を突っ込んだ以上は、必ず解決までお手伝いしますよ」

「助かるのです。でも、無理は禁物なのですよ？」

「もちろんですよ。友達を置いて死ねませんからね」

さて、次は第2関門。白龍皇だ。

外法の魔術と四凶の擣杵 前編

話が終わった後のこと。

「さて、琥太君はどうするの？このまま此処で一夜を過ごす？それとも、家に帰る？」

「俺の家は駒王の方ですし、学校は分体に任せてるので大丈夫です」

「駒王!?結構遠いわね？」

「まあ、それは兎も角、話によれば明日は鮫島？って人を探すんですよね？」

「なのです」

「分かりました？あの、そろそろ寝ても良いですか？割と眠気が限界で」

見ればもう夜の10時半。小学四年生程の琥太にはもう眠気が抑えられない時間帯に入るだろう。

「ふふつ、良いですよ。部屋は？です。おやすみなさい。コータ」

「ふぁい？」

そのまま琥太は部屋に向かい、ベッドに沈み込んだ。

—————

次の日の朝

リビングに向かうと、とてもいい匂いがした。

「んー??」

寝ぼけ眼を擦りながらリビングに向かうと。

そこには、野菜スティック、オニオンスープ、ツナサンド、ジャムの添えられたフレンチトーストがあり、エプロンを畳む鳶雄さんと、はしゃぐ夏梅さん、目がフレンチトーストに釘付けなラヴィニアさんがいた。

「おお？美味しそう」

「あ、琥太君。おはよう」

「おはようございます。鳶雄さん」

「おはよう！琥太君！」

「おはようございます。夏梅さん」

「おはようなのです。コータ」

「おはようございます。ラヴィニアさん」

と、俺は挨拶を済ませ、空いてる席の方に向かいつつ。

「俺の席ってここですか？」

「うん。そうだよ。おかわりもしていいから」

「? 鳶母さんとお呼びしても?」

「なんで!？」

「もうおかんですよ。その料理スキルは」

作る理由に関してもおかんだしな。

「まあ、兎も角………いただきます」

早速ツナサンドを一口頬張り、オニオンスープを呑む。? うん。

「凄く美味しいです。鳶雄さん」

「?! そう言ってくれると嬉しいな」

思わず笑みが零れるような美味しさだ。

横を見ると、夏梅さんも、ラヴィニアさんも舌鼓を打ちつつパクパクとご飯を食べている。

「カップ麺の袋を開けたままにしてみましたので、後でヴァーくんにあげるのです」

「ヴァーくん?」

俺は知らない風に、鳶雄さんは本当に知らないなのでその名に疑問符を浮かべつつその名前を呼んだ。

「このマンションに住む琥太君くらいの生意気な男の子の事よ。カップ麺ばかり食べててね、私達のカップ麺もその子から貰ったの。成長期なのに不健康すぎだわ。今度幾瀬くんの料理を振る舞ってあげてね!」

やはりこの世界軸でもラーメン好きは変わらないか。

「あ、夕飯は僕も手伝いますよ」

「え? 良いのかい?」

「勿論です。僕も料理は得意ですから。手伝わせて下さい」
「わかった。ありがとうね」

「いえ、当然の事ですし」

作ってもらってばかりはなんか申し訳ないからな。

「さて、今日の予定だけれど」

軽く纏めると、これからの予定は町外れの廃業したデパートに居るであろう『鮫島綱生』の保護で固まった。その為に今朝食を済ませ、マンションから出た。

「—————」

デパート内部にて

「やっぱり、暗いわよね」

夏梅さんの眩きは、小声ながら店内に軽く響いた。

「—————ああ、そーだな。『侵入者』」

突然、男の声が出た。

「なっ!？」

「ウツセミじゃ?ない!？」

それに対し、ラヴィニアさんと俺は静かに戦闘態勢を取り、鳶雄さんと夏梅さんも仰け反りつつも戦闘態勢に移る。

「俺は虚蝉機関の用心棒を務めている。名前を名乗るつもりもない。

恨みは無いが、死んでくれ」

「言い、こちらに向かってくる。が

「随分と単調だな?用心棒」

修行で使えるようになった瞬動を利用して用心棒の腹に拳を添え

る。そして—————

「解放。『雷エーミツタムの投擲ヤクラテイオー・フルゴリス』」

雷の投擲を解放し、雷の投擲槍を排出し、用心棒を突き飛ばす。

「鳶雄さん、ラヴィニアさん、夏梅さんは鮫島さんを。俺はこの用心棒を片付けますので」

「?わかったのです。さあ、行きますよ!トビー、夏梅!」

「—————、わかった!任せたぞ!琥太君!」

「無茶しちゃダメよ!」

「安心して下さい。コイツ程度には遅れを取りませんから」

「—————、そう簡単に逃がすでもっ!」

「解放、『魔法の射手・光の3矢』」

「ちい！面倒なっ！」

そして、走り去る3人を逃がさんとする用心棒何某に『魔法の射手』で牽制する。

「?さて、無事に行ったな。じゃあー」

覚悟しろ。

瞬動で用心棒の目の前に接近。そのまま腹に蹴りを入れる

「ガッ、ハアアアアア!?!」

デパートの壁に叩きつけられる用心棒を他所に、俺は呪文を紡ぐ。

「アストラ・マ・ストラ・アウストラ! 来れ深淵の闇、燃え盛る大剣

!! 闇と影と憎悪と破壊、復讐の 大焰!!

我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者ッ! 『奈落の業火』

!!

呪文を完成。そのまま打ち出す所をー

「術式固定!」

固定!そうして魔力をこの手に収めて、

「掌握!!」

この身に浸透させる。

「魔力充填、術式兵装『獄 炎 練 我』」

そうして成されるは『闇の魔法』。ある世界では禁呪とされた邪法

にして外法の理。

「な、なんだ、それはっ!」

「君に教える必要、あるかな?」

「ちいっ!」

すると、用心棒とやらは神器と思われるものを展開する。火炎を宿

した両手? 『白炎の双手』? いや、これは?

「『白炎の双手』じゃない? いや、亜種か?」

「どうだろうな。行くぞっ!」

用心棒は両手から炎を噴出させ、加速しながらこちらに殴りかかっ

てくる。

「ちっ!」

俺の拳と、相手の拳がぶつかり合う。

俺がまだガキとはいえ『闇の魔法』状態の俺と打ち合える?!?ただの人間じゃあねえな。

しかし、瞬動に対応できてなかった点から異形とも思えない。

「?なんだ?お前は」

「それはこつちのセリフなのだがな」

すると、相手はわざと拳を引き、もう片方の拳を叩きつけにくる。しかし

「甘い」

それをそのまま片手で掴み取り、相手を投げる。

「なっ、子供の腕力じゃないぞ!」

相手は炎で姿勢を制御し直し、立て直す。

「いつまでも相手をしていられない?本気を出さなければならぬようだな」

すると、相手のオーラが膨れ上がり?

『バランス・ブレイク禁手化』

瞬間、腕に燃え盛っていた炎は結実し、白く赤い両籠手に、背の方に大きな炎の拳が4つも浮かび上がった。

『ティタノ・バーニング・シエイク巨人の白炎手』!きて、ぶん殴る!」

用心棒は俺に殴り掛かりながら、背後の巨大な炎拳4つを飛ばして攻撃を仕掛けてくる。

「?マジかよっ!」

俺は『獄炎練我』の炎の出力を上げ、殴り掛かる。

大きな拳を4連。避けつつ本体とラッシュに入る。が

「ぐっ!拳が、不規則に速い!そうか、ブースター!」

「気づくのが早いじゃないか。それ、ご褒美だっ!」

そのまま速く、重い一発を貰い、飛ばされると。

「ぐっ!?!がああああ!?!」

焔の四拳に挟まれる。それに伴い、『獄炎練我』も解除された。

「まあ、ガキにしちやあ、強かったぞ」解放、『ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス雷

の暴風』

なあっ!?!」

しかし、そのまま体制を立て直し、『雷の暴風』を叩き込む。
「ちっ、避けたか」

まあいい。これが大事なんだ。

「このっ……!!」

お返しとばかりに相手側が炎の拳を飛ばしてくる。

が、それを避けつつ、詠唱。

「解放、『雷の暴風』。『術式固定』、『掌握』、『魔力充填』、術式兵装
アギリタリス・フルミニス
『疾風迅雷』」

そのまま、炎の拳を無力化する為、詠唱を続ける。

「解放、『雷の投擲』×4」

自身を中心に雷槍を発射し、炎の手を壁に縫い付ける。そのまま、瞬動に入る。

「その技はもう見切ったあ!」

あいつは着地点と思われるところに向かって拳を向けるが、それも織り込み済み。

拳の少し手前で体勢を変更、拳を避けて懐に入る。そして

「何を見切ったと?」

「な、あ……!!」

「解放、『雷の暴風』!!!」

至近距離の『雷の暴風』を叩き込んだ。

「が、あ?!」

「?っふう。やりすぎだよなあ?これ。」

さて、捕縛して、と。

「みんなのところに行くか」

鮫島さんと会えてればいいんだがな

外法の魔術と四凶の禱杓 中編

敵の処理が終わった為、そのまま追いかけて行く。すると、

「……!？」

5階の方から不自然な気配オーラの高まりを感じた。

「なんだ、これ？ 烏天狗？ 鬼？ いや、んん??？」

「なんだ、この、混ぜ物のような、そうでないような??」

「……」

ところ変わって5階。

鳶雄達は童門に拘束されていた。

「ちようど、この場に君と縁のある者を連れていたようだ。後方にいる者は前に出なさい」

そこには、鳶雄の友人がいた。

「？ 佐々木？」

昨日魔方阵に飛ばされた友人がここに居た。

「昨日、1度君に倒された子だねえ。けれど、こちらの技術で分身体を再生できる場合もあるのさ」

「やめろ！ 佐々木！ 俺だよ、幾瀬だよ！」

鳶雄は呼び掛けを必死にかけるが「……」

「無駄だぜ。こいつらを操ってるヤツらを叩かない限りは、襲いかかってきやがるのをやめやしない」

童門はこちらの反応を楽しみにつつ、佐々木の首を掴み、子犬の頭の刃に詰め寄らせる。

「まだ、ヒトを斬ってはいないのだろうか？ 『四凶』とされる君達の神器がヒトの血を覚えた時何が起こるか「……」実に興味深いとは思わないかな？」

「ツツ!! てめえ、卑怯にも程があんだろうが?!」

それに対し童門は

「何を言っている？ 元はと言えば君達がああの豪華客船に乗らなかつたのが悪いのだ。それを隠蔽した黒き翼の者達には是非とも文句を言

「いたいものだが？」

などと、愚痴を続けていく。そこで一転し苦笑する。

「いや、だからこそ神の子を見張る者達と呼ばれるのだろうか。神器は神からの贈り物とされるからね」

佐々木がこちらに視線を送り、口を動かす。

「うらぎりもの」

「佐々木？」

そうだ。自分は裏切り者なのだろう。あの旅行に参加せず、彼らを巻き込んだ。こんな理不尽なまでに異常な事態に投げ込まれ、化け物の主として級友と戦うよう仕向けられた。

これが裏切り以外のなんだというのだ?!?

ふいに鳶雄の脳裏に旅行前の佐々木との会話が蘇る。

放課後、帰り道で佐々木は気恥しそうに言った。

『なあ、幾瀬。俺な、今度の旅行でC組の室瀬にコクろうと思ってんだ？』

佐々木は事ある事に室瀬のことを口にしていた。恋路に疎い鳶雄でも、佐々木が彼女に恋しているのぐらいいは知りえていた。佐々木は鳶雄の背中をばんばんと叩く。

『もし、もしもさ、玉砕したらその時はあつちで慰めてくれよ！頼むぜ！』

普通の学生だ。佐々木は普通の高校生だ。

勉強して、運動して、笑って、怒って、泣いて、恋する。どこにもいる普通の男子高校生だ。

童門が子犬の刃に佐々木を近づけていく中、佐々木はくぐもった声を発する。

「？い？いくせ？」

「……、自分の、名前？」

佐々木は無表情のまま。泣いていた。

「たすけて？」

思わず、泣きそうになった。ウツセミであるはずなのに、俺の名前を呼んでくれた、救いを求めてくれた。

「これは？素晴らしい！」

うるさい。黙れ。よくも、俺の友人を?!親友を!

「まだ意識があるのか!興味深い!彼らを捉えたらー」

「?れよ」

「ん?なんだい?」

「黙れよ。屑」

「なんだい?いきなり。そもそも君達があの際に参加しなかったのが悪いんじゃないか。ああ、そういえば、君は『幾瀬』か、確か東城紗枝と懇意にしていたというデータがあつたねえ。いいだろう。会わせてあげよう。彼女も良いウツセミになつてるよ。ああ!思い出した!」

紗枝、紗枝が良いウツセミ?!?

「彼女は実験中いつも『とびお、とびお』とうわ言のように呟いていたよ。ああ。君のことだったか」

瞬間、俺の中で『何か』がトんだ。

殺意が渦巻く。怒りか迸る。ああ、もうダメだ。俺はこいつを赦せない。

あいつが何かを口走っている。聞こえない。聞くつもりにもなれない。

こいつが許せない。人の思いを、尊厳を、全てを踏み躪る醜悪な愚物を、何をもって許すというのか。

気づけば、心の限りに叫んでいた。

「俺に力を貸せエエエエエエエ!!お前は《刃》なんだろオオオオオオオオオオツツツツ!!!」

そうして、体の裡から吹き上がるような力と共に、影から、刃から、歪なる《刃》が突き出る。その刃はウツセミを残さず切り刻み、その残滓を残すことも赦さない。

「影からの刃!?なんだ、これは、『四凶』!いや、そんなものではない!これは、最早ー!!!」

「去ね」

そのまま、刃が童門ツクスの右手を斬り落とす。

「ギイアアアア!?!」

「叫ぶな」

耳に障る破れ鐘の音を遮るように、第2の刃を右太腿に刺す。態とより歪に、刃毀れさせながら創った刃だ。

「アッ、アッ」「叫ぶなと言っただろうが」

第3の刃が、童門クズの顎を撃ち抜く。態と鈍に、そして先を尖らせずに創った刃は鋭い刃とはまた違う苦痛を与えた

「ゴ?ア?! 貴様ア! 許さん、許さんぞ! 来い! 『星熊天狗』!!!」

瞬間、少女が召喚された。

「呼出に応え、推参しました。命令を、主」

その少女は異質だった。鬼のような角に、白い髪と赤い瞳、そして白い鳥の翼。その少女は一切の感情を抜き取ったような声で話している。

「あそこの『狗』使いを行動不能にしろ!」

「諾」

少女は俺に斬りかかってくる。が

俺は刃を出現させ、足止めしつつ。

「あがああああ!?!」

細かい針のような刃を童門クズに刺す。

「うぐううううう!?!何をやっている星熊ア! 早く殺せ! 使えぬ塵め!

早く『忌手化』しろ!」

『オビドウン・フレイク』
「はっ。『忌手化』」

瞬間、異質なオーラが周囲を包む。なにか、合わさらないふたつが合わさったような。気持ちの悪い感覚。言葉に表せない、醜悪な『ナニカ』。その澱んだ黒い、瘴気にも似たオーラは、少女を包み、少女を少女ではない『ナニカ』に変質させる

『ツーーーーーガアアアアアアア!!』

黒いオーラが晴れると、そこには、怪物がいた。

灰色の翼、赤く長く、太い鬼の一本角。白目が黒く反転し、赤い瞳の瞳孔は縦に割れている。黒いオーラは鎧のように少女の各部に取り付けられ、右手には黒く侵食された剣が現れている。

「ふっ、ふはははは！どうだ！我らが研究！人に取り付けることで人を変質させながら式神とする術！呪器カースト・ギア！いくら化け物とはこれには勝てまい！」

おい、まて。こいつは今、なんと言ったー？

「おい。童門クズ今、なんと言った。人を式神につて言ったか？」

「は？ああ。言ったが？」

「何故した？なんで、こんな事が出来る。あの子はまだ幼いだろう！」

「何を言ってるんだ、お前は？」

心底分らない。という顔で言う童門クズはこう続けた。

「あいつはアルビニズムの烏天狗の半妖。忌み子として捨てられ、のたれ死ぬところを私達が保護してやった。であれば、どう使おうと私達の勝手だろう」

「ーそうか、もういい。話すな」

返しの着いた刃を、童門クズの顎に突き刺し、口を開けなくした。

「ぐぶう!？」

主に危害を加えた事で、少女ーであつたものが俺に襲いかかる。

「速っ」

刃が俺の眼前に迫りー

突き刺さー

「エーミッターム・デイオス・テュコス
解放、雷の斧」

る前に、雷が迸り、少女であつたものを吹き飛ばした。

「変なオーラが気になって急いでみれば？随分苛つく事態になってますね？鳶雄さん。あの娘は任せてください」

まるで、ヒーローのように。頼りになる少年が降り立った。

外法の魔術と四凶の禱杓 後編

「変なオーラが気になって急いでみれば？随分苛つく事態になってますね？鳶雄さん。あの娘は任せてください」

どうにか5階に到着し、あの鬼の女の子を吹き飛ばした。

「わかった。ありがとう、琥太君」

その言葉と共に鳶雄さんは無数の刃で童門を斬り刻みにかかる。その時

「計久ッ！ここは引け！その実験体で足止めをするぞ！」

「姫島室長！」

その名前に気を取られた鳶雄さんは、少し行動が止まった。その隙に童門はフラッシュユバンのようなものを発動させる。

「面白い。いずれまみえようー」『狗』よ」

そのまま、童門は転移した。

「ー」少女を置いて。だ

「ー」そうかよ。クソツタレめ」

成程。ハナから回収するつもりは無かったようだ。足止めーつまりは捨て駒。恐らくこの状態には何らかの不具合があるのだろう。

「鳶雄さん。みんな。ここは退いてください。ボクがこの娘を鎮めますので」

「なっ、そんな、君だけに任せる訳にはー」

「鳶雄さんの体力、もうほぼはないでしょ？それに、気になる事もある筈だ。ここは僕にまかせてください。この娘も助けてみせます。それにー」

今からの僕の姿を、貴方達に見せたくない。

「ー」わかったのです。行くのですよ。トビー」

「でも！」

「コータなら大丈夫なのです。コータを信じてあげてください」

「？わかった。琥太君、死なないでくれよ」

「絶対、無理しちやダメよ！」

「?死ぬなよ」

その言葉に、僕はそつと、サムズアップで返した。
それを見て、みんなは駆け出していった。

「……さて、行くぜ?」

『ガアアアアア!!』

女の子は、超加速して俺に向かってきた。成程、これは雷の精霊の力だ。恐らく神セイクリッド・ギア器だろう。

「解放、エグゼキューションソード」

右手の手刀を魔法の冷たい刃が覆う。

その剣で、相手の剣を受け止める。

『ガアアアアアッ!』

成程。獣の様だ。まるで、始めから制御など考えられていないかのような。

いや、考えられてなどいないのだろう。これは言わば生体兵器を作る為の技術だ。

兵器に情など不要ず、自我など非ず、怯え等以ての外。

だからこそ、こうしたのだろう。

「巫山戯るなッ!!!!どれだけ人の心を踏みにじれば気が済むんだッ!」

手刀を押し込み、弾く。

「解放、エーミッター・エト・スタグネット固定。キーリブル・アストラペー千の雷!コンプレクシオー掌握。プロ・アルマティオーネ術式兵装
へ!アストラペー・ヒューベル・ウーラス・メガデユナメネー
「雷 天 大 壮」

そうして、この身に雷を降ろす。

『ツ!ガアアアアア!!』

女の子は、黒い雷を剣に宿して、鬼の気と烏天狗の気を放出させる。この状態がやばい。と察したのだろう。そうして、鬼の気と烏天狗の気を複合させて、精霊の雷と合わせる。そのまま、駆け出てきた。

「……」『雷速瞬動』

瞬間、身体が雷化して、雷の速度で駆け抜ける。

「解放、エーミッター魔法の矢・雷の1000矢。サギタ・マガカ・セリエス・フルゴリス雷華天掌ッ!」

『ガアッ!』

女の子に掌底を当てて、魔法を解放する。

とは言え、これではダメだ。救えない。外部でダメージを与えるのではなく、内部から。精神ココロの側から救わねば。ただ、それを今行っても外側で殺される。であれば、

「捕縛、封印か」

幸いな事に、戒めの風矢もストックしてある。ついでに結界魔法で封印しつつリンクを繋げよう。

腰のベルトから7つの杭を取り出し、雷速瞬動で定位置に配置、6つの杭の中心に最後の1つを置く。瞬間、杭に仕込まれた機能で、全ての杭がリンクし、魔方陣を作る。

『ガッ!?』

いきなり浮かびあがった魔方陣に警戒する女の子に雷速瞬動でまた近づく

『ガアッ!』

しかし、女の子は雷速瞬動に対応してカウンターを放とうとするが。

「織り込み済み」

バックステップを行い、更に懐に潜る。そして女の子に掌を向けて、

「エミツタム解放、サギタ・マギカ・アエル・カブテユーラエ魔法の矢・戒めの風矢×100」

そのまま、100の風が女の子を捉える。

「Ogre capture field sextuple expand邪鬼封縛結界・6重展開」

そうして封縛結界を貼り、万全を期す。

「Mental connection思念接続」

そして、少女の精神内部まで侵入する。

—————

そこは、濁流だった。

殺意と悪意に溢れた醜悪で悪辣な絶望と羨望に塗れた黒い流れが心を侵し、怒りと悲しみと妬みと嫉みと怨みに溢れたココロが信念を手折る。

「ッーーーーー」

思わず、愕然とする。このようなココロが、あつていいのか。虚蟬機関が、そのようにしたのか。あるいは――

いや。今はいい。今すべきは救出だ。詮索ではない。

黒い流れを進む、進む、進む。

心の中に、景色が浮かぶ。

――

『忌み子め』

『死ね』

『里に不幸を運ぶな』

『生まれて来なければよかったのだ』

『人との間に生まれた半端者の上、忌み子であるとは業が深い。せめて安らかに殺してやろうか?』

――

こんなものは断片だ。欠片だ。この子が受けてきた物の一部に過ぎない。

だというのに、涙があふれる。

このような物はただの同情に過ぎないし、安い偽善かもしれない。

でも、俺は――

「この子を、助けたい」

どンドン、どンドンと進んでいく。その度に、悲しみが溢れていく。

この子のココロの根源まで行って、そして――

小さな白い子に出会った。

絶望と悲しみによって顔から感情は消え失せ、その瞳には輝きすらも宿っていない。失望と諦観の澱みが宿るのみである。

ふと、目が合った。

「なんだ、お前は?」

「君を助けに来た者だ。」

そう言った瞬間、少女の目に溢れんばかりの怒りが生じた。

「嘘だッ!!お前と同じ事言った人は!私を実験台にした!優しくし

て、私を騙して！私の事をつ！お前もそうなんだ！私があいつらに捨てられたから！今度はお前が私を――！！！！」

そう叫ぶ少女を抱きしめる。

「おい！何をする！やめろ！はなせ！私はっ私はっ――！！！！」

声が歪む、泣いているのだろう。俺の肩には熱い液体がぽたぽたと落ちてきた。

「なんで、なんで誰も私をたすけてくれないんだっ！こんなに苦しいのに、悲しいのに！たすけてくれたひとだって、私をつ！私はっなんのために生きてるんだ！私は、わたしはなんのためにいければいいんだっ！」

「だったら」

少女の叫びに、俺は答える。

「君が生きる理由を見つけれないなら！俺と一緒に探す！だから、俺と一緒に生きよう！俺は君を見捨てない！君がどこに行っても、何処に連れ去られても、俺が君を助けてみせる！救ってみせる！俺が君の味方になる！」

「会ったばかりのお前を信じろって言うのか？」

「馬鹿な事を言ってるって分かってる。それでも、信じてくれ」

「馬鹿だなあ。私なんて見捨てて殺してしまえばよかったのに」

「そんな事は、絶対にしない」

「お人好しめ。――――ありがとう」

泣きながら笑顔を浮かべる少女はすごく綺麗で、なぜか、心がザワついた。

「俺は竜胆琥太。君は？」

「私は――――いや、今までの名前は要らないな。頼むよ。琥太。君が私に名前をつけてくれ」

「え？」

「私を捨てた親は、私に名前なんて付けなかったし、虚蟬機関の奴らは、『壺壺漆號』とか、『星熊天狗』としか呼ばなかった。そんなの名前じゃあないからな。お前が着けてくれ。苗字は竜胆以外認めないぞ？」

と、悪戯に笑う少女は可愛らしくて、きつと、本当の少女はこうだったのだろう。と、思った。

「わかった。うーん、そうだな、怜。竜胆怜なんてどうだろう」
怜？清らかに澄んだ心。という意味だ。

「怜？れい。うん。いいな。私は竜胆怜。これからよろしく。琥太っ！」

ああ、やっぱり。いい笑顔だ。

助けた甲斐があったってモノだ。